
魔王子復讐記

おかむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王子復讐記

【Nコード】

N5383Y

【作者名】

おかむ

【あらすじ】

魔王サタンが倒され存亡の危機に立たされた魔族。

正義と悪、魔族と人間、相反する二つが交じり合って混沌とした世界を舞台に魔族の再興と勇者への復讐を果たすべく、残された魔王子ルシファアの旅が今始まる！

深まる謎？真実の答え？分からない事だらけでも歴史は止まってくれない。

友との出会いと別れを繰り返し、果たしてルシファアは勇者への復讐を果たす事が出来るのか？

復讐系ファンタジー。

001（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

↓ 指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「カンヘル。右前方、注意！」

「御意。」

ルシファアの言葉にカンヘルは応えると、拳を前に突き出して突進してきた衛兵を弾き飛ばす。

「ルシファア様っ。」

後方より突進してきた長槍兵を素早い一撃で牽制したニヤルは再び距離を取って、周囲を警戒する。

ここは ゴルジディアン の森。

かつては 古種ゴブリン族 の聖地として栄えた地はあるが、人間の前線支援基地があるために、周囲の廃墟とは違い、衛兵達が駐在していた。

「しかし、ここまで多いとは。」

「弱気だなんて珍しいにや。」

「なっ！？弱気などではない。」

カンヘルとニヤルのやり取りには反応せず、ルシファアは詠唱を破棄し右手を衛兵達に差し向ける。

同時に周囲を取り囲んでいた衛兵達が青白い炎に包まれた。

ポチャノボンは任意の対象を青白い炎で包む初級魔法だ。

断末魔の叫び声を上げて地面をのた打ち回る衛兵達を見ながら、ルシファアは背中の大剣を引き抜いた。

そして躊躇無く刃を突き立てていく。

叫び声は途絶え、次に鮮血が地面を赤黒く染め上げていく。

ルシファアが無尽蔵に思える程の魔力を有しているとはいえ、万が一の危機に備えて魔力を節約することは重要であった。

とは云ってもルシファア程の魔力をもってすれば初級魔法の一つや二つでは、その顔色一つ変える事さえあり得ないわけだが。

「前方より弓兵！」

「了解っ！」

「はいにやつ！」

それに万が一魔法が使用できない状況になったとしても、今のルシファーにはふたりの友がいる。

「防御結界 イージス ツ！」

両の腕を前方へと向け構え、魔法結界を発動した鎧の戦士はカンヘル。

岩の体と温厚そうな眼差しを持つ大柄な男で、ルシファーとは旧知の仲である。

種族は 岩人族。

大柄な体躯で敵の攻撃を一手に引き受ける強固な防御能力を持ち、かつての戦場においては不沈要塞の異名を誇っていた。

「……遅いにゃ！」

そのカンヘルの防御結界で弾かれた矢を見て怯んだ弓兵達の隙を、猫耳の少女が突く。

近接戦闘の備えを持たぬ弓兵達は仕方なくその手に持った弓を振りかぶるが、彼女は構えた刃で、駆け抜けざまに斬り捨てた。

黒い尻尾を風に漂わせる小柄な少女はニヤル。

ルシファーの事を様付けで呼ぶ彼女もまた、ルシファーの友人である。

種族は 猫耳族。

小柄な身体と素早い身のこなしを特徴とし、その動きは二足歩行が可能な魔族では地上最速とも云われる。

その二人の動きを見ていた、ルシファーは再びゆっくりと前進する。

ルシファーの種族は 魔人族。

魔族最高とも名高い魔力と明晰な頭脳を誇り、数多の大魔術師を輩出している。

中・遠距離戦闘では魔法、近接戦闘においては魔剣と呼ばれる魔力で強化した固有の武器を持って敵を殲滅する完全な魔法攻撃特化

種族だ。

だが魔法攻撃に特化した種族の宿命として物理防御力は心許無い。カンヘルの頼りがいのある岩の皮膚はともかくとして、ニヤルのような素早い身のこなしもルシファーには出来ない。

かと云ってルシファーがカンヘルのような全身鎧を着けることは無い。

魔人族の辞書に「防御」の言葉は無い。

数多の戦場における彼らの先祖からの教訓は「殺られる前に殺れ」だ。

だからと云って物理防御力に乏しいルシファーが戦場で孤立する事は望ましくない。

いつ敵の奇襲を受けるか分からない状況を見ると、背後からの奇襲を警戒しながらカンヘルやニヤルと一定の距離を離れずにいる方が得策である。

勿論この ゴルジディアン の森 はそこまで重要性の高い前線支援基地があるわけではない。

現れる衛兵達もルシファーに奇襲を加える程の手だれや高度な魔法を駆使する魔法使いなどではない。

ルシファー達三人はそれぞれが一軍の将を務める程の高位の魔族だ。

尤も今やその一軍すら存在しないのが魔族の現状ではあるが。

いくらルシファーの物理防御力が低いとは云え、これだけ実力の差があるとそうそう奇襲を喰らうようなこともない。

そもそも、カンヘルは敵が多いと云うが、三十程度の一般兵など、三人の内誰だって、一人で殲滅する事が出来る程度の数である。

（とはいえ、この程度の兵だからだが。）

先ほどから、口では余裕を見せているカンヘルやニヤルだが、その表情はどこかこわばっている。

戦闘、そして殺傷というのは恐ろしいものだ。

いくら優れた肉体と能力を持っていて、圧倒的に有利に戦闘を進め

られるとはいえ、敵と対峙するのは恐怖と緊張感を伴う。

襲い来る兵士も、それを受け止めるのも、そしてそれを殺すのも、全て自分自身で為さねばならない。

前線ですらに対処し、止めを刺すというのは、想像以上に精神力を要する。

それらを乗り越えるためには、場数を踏むしかないだろう、というのがルシファーの出した結論である。

「右方っ！」

「了解っ！」

焦りの表情で汗を滴らせながらも、ルシファーの声に素早く反応して、カンヘルは右腕を叩き付けた。

その一撃は、当たり前こそしないものの、長槍兵への牽制にはなったようだ。

身の丈ほどの長槍を構えた衛兵は、動揺とあからさまな敵意が入り混じった眼差しを向けながら、二歩程後退し距離をとった。

この一撃もそうであった。

ルシファー達は一軍の将を務める程高位の魔族だ。

本来であれば、こんな前線支援基地の衛兵程度の相手に攻撃を失敗するなど、考えられない。

こんな所にも、経験の不足が見て取れる。

身体と能力がいくら高位の戦士であっても、今はその力を十分に発揮出来ていない。

「マイシユテルンッ！」

それなら確実に敵を殲滅出来る術を選ぶべきだと考えたルシファーは、広範囲に効果のある魔法を詠唱した。

マイシユテルン は任意の対象の動きを鈍くする凍結系中級魔法だった。

周囲を囲んでいた衛兵達の身体の一部が氷漬けになる。

とはいえ、致命傷には至らない。

そもそも凍結系魔法は攻撃よりも妨害に向いている魔法が多く、

大きなダメージは与えられない物が多い。

その証拠に、ルシファアの放った魔法を喰らった衛兵達は動きこそ鈍ってはいるが、その敵意は確実にこちらに向いていた。

「さすが我が主。おりゃああああ！」

動きが鈍った衛兵達をカンヘルが両の腕を振り下ろし、地面に叩きつけていく。

「感謝するにや。ハアツ！」

残った敵もニヤルが素早い一撃で斬り捨てて行く。

倒れていく衛兵達の断末魔とは対照的な二人の明るい声が響く。

戦争の経験の無いルシファア達にとって、まだ難しい戦闘だがその能力差は明確だ。

その動きが鈍ったとあれば、あとは接近して、一撃を見舞わせるだけである。

「フンツ！これで十五人目。」

「こつちは十七人目にや。」

「ぬっ……やりますな、チビ猫殿！？」

「チビ猫って云うにやー！でくの坊っ！」

元来、暗い事を考える二人ではない。

温厚で忠義に厚くタフなカンヘルと、そのカンヘルを軽口と冗談で手玉にとるニヤルだ。

きっかけとちよつとした手助けがあれば、次々と衛兵達を倒し始める。

ルシファアの狙いは最初からこうだった部分にあった。

あとは二人が止めを刺し損ねた敵に、背負った大剣を突き立てていくだけでいい。

今相手にしている敵はルシファア自身が強力な攻撃魔法や大剣を開放して攻撃を加える必要はない。

考えて見ればなんという事ではなく、それはこれまでの修行と教え通りの基本的な戦闘に違いなかった。

（しかし、どこまでこの力を使わずにいけるか。奴はこの程度の雑

兵とは格が違う。奴だけではなく、他も侮れない。」

ルシファアはそんなことを考える。

「ハッ！私の獲物だ！」

「あげないニヤ！」

戦場とは思えない楽しそうな声。

カンヘルもニヤルもルシファアが目的を果たすために行動を共にする旧知の友だ。

今まで厳しい修行をこなしてきた彼らならきっかけさえ掴めば、躊躇や戸惑いは消える。

「これで、最後ですか？」

カンヘルが両の腕で衛兵を地面に叩き付けて尋ねる。

ルシファアが考え事をしている間に戦闘は終結していたようだ。

ルシファアはその言葉に頷きながら、両手をカンヘルとニヤルに向ける。

「ああ。情報によればこの前線支援基地の兵員は五十四名。こいつで最後だ。」

ルシファアは詠唱を破棄し初級回復魔法 ヒルン を発動する。

カンヘルとニヤルは殆ど攻撃を受けていないが、念には念を入れた形だ。

「いっぱい倒したにや。」

ルシファア達は初陣に勝利した。

ルシファアは最初の戦場としてこの ゴルジディアンの森 の前線支援基地を選んで正解だったと思う。

たった数度の戦闘の中で、これ程格下の相手に対し幾度も攻撃を失敗した。

後半は完璧とも云える戦局の展開に成功したが、最初から中規模以上の拠点や基地を襲撃していたら戦況は変わっていたかもしれない。

幸い、陽はまだ高い。

「今日はここでキャンプにしよう。」

前線支援基地だけあって、ここで一夜を過ごすには充分すぎる備品や食料があった。

「ニヤルは一応周囲を警戒してくれ。カンヘルは寝床の準備。俺は料理を。」

「了解。」

「わーい！ルシファア様の手料理だにや！」

カンヘルは基地という名の木造の建屋に入り使えそうな寝具を探す。

ニヤルはルシファアの手料理に歓喜しながらも、身を低く構え周囲の警戒に当たる。

ルシファアは厨房を拝借しシチューを作る。

三人の旅は始まったばかりだが、なんにしろ彼らにとっては最初の勝利であった。

それは彼らの壮大な目的に比べれば小さな事に過ぎない。それでも今宵ばかりは楽しくありたいと願うのであった。

「ルシファア様ー、おいしいですよにや。」

猫舌のニヤルは頬を赤らめ、シチューを冷ましながら頬張っていた。

「うぬ。さすが我が主。誰かさんとは大違いだ。」

大食漢のカンヘルは今宵も匙の勢いが止まらない。

「おい！そのでくの坊……その誰かさんとは誰のことにや！」

「心当たりがあると云うのなら、それで正解ですよ。」

「なんにやとー！貴様、レディーに向かつてにやんと失礼にや！」

「レディー？果てさて……どちら様の事でしょうか？」

「にやにやにやにやー！」

ルシファアは二人の応酬を横目にシチューを頬張っていた。そして思い出していた……。

あの夜の出来事を。

旅立ちと大いなる復讐を成し遂げる事を決意した夜の事を。

001（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

↓ 指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

雷鳴が轟き、ガラスの割れた窓からは豪雨が降り付ける。

絢爛豪華な造りを施された王の間は雨風と激しい戦闘によって、見るも無残な姿へと変貌していた。

アーシラト高原、魔王城最上階、王の間。

そこは比類なき魔力とそれを有効に活用する天才的な頭脳をもつて、すべての魔族と束ねる王の中の王、大魔王サタンの社であった。十年前、ルシファアがまだ八歳の時の出来事である。

「嵐神バアル よ！その怒りをもって我らに勝利の輝きを！……

ラピムヘビヨン ッ！」

ラピムヘビヨン は任意の単体に雷撃を与える攻撃系の上級魔法である。

豊かな白い髭をその顎に蓄えた魔道士マフューは、嵐神バアルの庇護を付与され、さらに強化された一撃をサタンへと向ける。突如としてサタンの頭上に出現した雷撃は唸りを上げて空間を引き裂き、サタンに直撃する。

「ぐっ……。」

サタンはとつさに魔力を放出し、これを防ごうとする。

しかし防御結界ですらないただの魔力の放出で防げるほど、マフューの一撃は易しいものではない。

サタンの両腕は黒く焼け焦げ、皮膚の内側の筋肉を痛々しく露出していた。

それでも攻撃は止む事は無い。

「軍神アレス よ！我にその導きを授けたまえ！…… 英霊降臨ッ！」

英霊降臨 は契約した英霊の力を任意の物体に付与する上級魔法である。

全身鎧に身を包んだ戦士チェムは掲げた剣に 軍神アレスの力

を付与した。

軍神アレスの魔力を付与されたチエムの剣は神々しい光を放つ。

「サタン……覚悟しろ！うおおおお！」

チエムは掲げた剣を振りかぶりサタンに斬りかかる。

サタンも咄嗟に魔力を放出しその斬撃に対抗するが、チエムの剣が纏った軍神アレスの魔力はサタンの魔力を物ともせず破っていく。

魔力の刃はサタンに致命傷こそ負わせられないものの、一方的にサタンの身体を傷つけていく。

「くっ……嵐神バアルに軍神アレスとは……恥を知れ人間共！」

魔力を放出しチエムの剣を必死に受け止めるサタンは勇者を睨みつけ、そう叫んだ。

「黙れサタン。英霊は貴様ら魔族だけのものではない。よもや忘れたわけではあるまい？」

「勇者よ！貴様ら人間は、そうまでして魔族を討ち滅ぼさんと欲するか！？」

サタンが言葉を投げ交わした相手こそが人間世界の希望にして、魔族にとつての侵略者である勇者ニーシュ。

人間の身でありながら魔族の六王にも匹敵する魔力を有する天才であった。

「俺たち人間は弱い。悔しいが、こうでもしなければ貴様には勝てないっ！だが、覚えておけ……俺はお前達が行ってきた悪事を許さない。」

「何を訳の分からぬ事を！」

サタンとニーシュの言葉は噛み合わない。

魔族の頂点と人間の希望、それぞれに思惑と背負うものがある。

「幾千年もの間、我ら人間を狭く荒れた地に押し込めてきた罪を償うがいい！」

ニーシュの言葉にサタンは戸惑いを覚える。

（それは違うぞ……勇者。まさかこやつは何も知らないだけではないのか？）

今まで激しい戦闘を繰り広げてきた勇者一向と魔王サタン。

しかしサタンはその戦いのなかで初めて、一瞬の思考の鈍りを見せてしまう。

「サタンッ！とどめだっ！」

ニーシュは鞘から剣を抜くと天高く刃を掲げた。

「勇者ニーシュの名においてここに宣言する！ 精霊王バハムートよ、我が身体と血の盟約を交わし、その力を我が袂へと降臨したまえ！」

（ばかな！？）

サタンは驚愕した。

精霊王バハムート は英霊の頂点に君臨する四人の神々の一人であつた。

高位の魔族ですら数えるほどしかその庇護を受けることが出来ないと云われる精霊王から人間が庇護を受けるなど、考えられないことであつた。

突如、巨大な地鳴りとともに城内の灯火が大きく燃え盛った。

それは火の精霊王であるバハムートの降臨を示す合図であつた。

近くにいても感じられるほどの魔力がニーシュの構えた剣が紅く染めていく。

サタンほどの強者であつてもその魔力が自らの魔力を遥かに超えるものであることが容易に想像できた。

そしてサタンはその盟約を交わす機をニーシュに与えてしまったことに絶望した。

「サタン……貴様も分かっているだろう。精霊王の降臨は今この瞬間より、降臨した精霊王の力無くして成されない。」

サタンは勇者達を見縊っていた。

魔法の行使をここまで控え魔力の放出だけに留めてきたのは、土

壇場の最後の一手として精霊王の庇護を受けることを考えていたからであった。

「魔族最大の失敗は 精霊王バハムート の聖地を我が人間の地に残してきた事だ。今となつては貴様が 精霊王アーシラト の庇護を受けることすら出来ない。」

ニーシュの言葉にサタンは言葉を失う。

「返す言葉も無いか……。魔剣を持っていなかったのが運の尽きだったな。サタン……貴様の命脈もここまでだ！」

ニーシュは紅く輝く剣と構えるとサタンに斬りかかった。

「はあああああ！！！」

「ぐっ……。」

サタンは寸でのところで斬撃を交わそうとするが、膨大な魔力の刃はサタンの身体を容赦なく斬りつけた。

すると傷口から黒い炎が噴出す。

（これがバハムートの力が……。）

尚も容赦ない連撃が続く。

「はあ！てやつー！！！」

その一撃が振り下ろされる度にサタンの身体から黒い炎が上がる。

（くっ……もはや……これまでか。）

サタンの身体はもはや限界であった。

燃え盛る身体で必死に斬撃を回避しようとするサタンであったが、もはや勇者に勝つ術は残されていなかった。

（だが、これで終わりにはさせん！）

サタンは死を覚悟した。

そして死の対価にふさわしい、魔族の頂点たる自らにふさわしい選択肢を選ぶ。

意を決し相対するニーシュを前に魔力の放出を止める。

次の瞬間、ニーシュの一撃がサタンの腹部を貫く。

「うっ……。」

引き抜かれる刃。

腹部から大量の血液が損なわれ、傷口を黒い炎が覆う。

生死を賭けた戦いが幕を下ろした瞬間であった。

だが、それとは別の……サタンの戦いが幕を上げた瞬間であった。

(くっ……間に合うか……。)

止め処なく溢れ出る血と薄れゆく意識の中でサタンは最後の魔法を心の中で詠唱した。

残った魔力の全てを用いて、その詠唱を口にするをしなかった。

詠唱の破棄はその魔力の量で可否が決まる。

今サタンが為そうとしている魔法は、彼以外の魔力をもつてして詠唱を破棄する事など出来なかった。

ニーシュに気づかれて対抗魔法を発動されることは許されない。

彼はその命脈が尽き果てる最後にその魔法を発動すべく、意識を集中していく。

その集中たるや王の間の背後の扉に潜む影の存在に気がつかない程であった。

ニーシュの一撃がサタンに突き立てられる四半刻前。

「坊ちゃま……緊急事態です！落ち着いて話をお聞きください。」

アーシラト高原、魔王城最上階、後宮。

後宮は大魔王とその家族専用の居住空間であった。

そこに家族以外で立ち入る事が許されるのは、ごく一部の限られた執事だけである。

「うーん……トウイーニー？どうしたの？」

「坊ちゃま、自体は一刻を争います。勇者一行が単身、王の間へと侵入しました。城の兵士は全滅、文官すら一人残らず殺される始末です。」

「!？」

トウイーニーは魔王城の後宮で魔王子付きのメイドを務めていた。
種族は 妖精族。

魔族随一と評される女性の美貌が有名な 妖精族 は、メイドや踊り子などとして貴族階級に好まれる。

トウイーニーはその 妖精族 の中でも絶世と呼ばれる美貌を持つて後宮勤めを勝ち取っていた。

そして魔法や勉学の才を持って魔王子の教育係まで務めていた。

「幸いサタン様が王の間で戦っておいでです。坊ちやまは一刻も早い脱出を。」

「父上が!？」

そしてトウイーニーが坊ちやまと呼ぶ少年こそ、大魔王サタンの息子にして次代の王の座を約束された才の持ち主である魔王子ルシファーであった。

当時まだ八歳であつたルシファーはあまりの出来事に動転する。

ベッドを素早く抜け出したルシファーはトウイーニーを無視して王の間へと走り出す。

「坊ちやま!?! いけません!」

トウイーニーもそれを止めるべくルシファーの後を追う。

「くっ……坊ちやま! 坊ちやま!」

後宮から王の間へはそう長くない距離であつた。

子供の足でも五分とかからない距離であつた。

ルシファーは王の間の扉へと手を伸ばす。

「坊ちやま!」

扉へと手が届く前にトウイーニーが追い着く。

「トウイーニー、離せ!」

「離しません!」

トウイーニーは断固たる意思を持つて扉の前に立ち塞がった。

「そこを……どけー! ツンララン ツ!」

我を忘れたルシファーは魔法の矛先をトウイーニーへと向ける。

ツンララン は任意の単体に氷の刃を向ける凍結系中級攻撃

魔法であつた。

鈍い音と共に氷の刃がトウイーニーの左目に突き刺さる。

トウイーニーは魔法の発動に気づきながら、それを避けようとしなかった。

「ぐっ……。」

彼女はルシファアの魔法を防げないほど無能でもなければ、ましてやそれをかわせないほど鈍くも無かつた。

自我を取り戻したルシファアは自らの行いに動揺した。

「あつ……ああ……。」

言葉を失い、がつくりと膝を落としたルシファアは頭を抱えた。

「……坊ちやま……どうか気を確かに。今最も重要なことは……坊ちやまの命です。」

その言葉はサタンが破れることを意味していた。

今眼前の扉を開け、助けに参ずる事は即ち死を意味する。

そしてルシファアの死は魔族の希望を喪失することを意味する。

トウイーニーは全てを理解した上で苦渋の決断を下し、それをルシファアに促したのだ。

「サタン様は……もう助かりません。ですが、最後のお姿だけでも見て参りましょう。その後は力ずくでもここを脱出していただきませう。」

左目を抑えながらトウイーニーはルシファアを諭した。

「トウイーニー……俺は……。」

「大丈夫です。私はこの程度の傷では死にませんよ。」

トウイーニーは血で染まる顔で笑ってみせた。

「ごめん……なさい。」

「いいんです。さあ、サタン様の最後のご勇姿をしかとその目に焼き付けてください。」

トウイーニーは厚い扉を中の者に悟られないよう慎重に少しだけ開いた。

そこからルシファアは目だけで王の間を見渡した。

（父上！？）

眼前に飛び込んできたのは黒い炎の中に身を包み、膝を着き頭を項垂れた父サタンの姿であった。

そしてその前に立つのは、見知らぬ人間の男……勇者ニーシュであった。

ニーシュは今まさに構えた剣でサタンの首を切り落とさんとする瞬間であった。

ルシファアは飛び出そうとする衝動を必死で抑えた。

「サタン……覚悟はいいか。」

「いいだろう。この首、貴様にくれてやる！だが忘れるな……死して尚、我魔王たることを……。」

「戯言を！死ねっ！」

ニーシュの一振りが振り下ろされるのと時を同じくして雷鳴が轟く。

「――！！」

サタンの最後の叫びは雷鳴に掻き消されルシファアには届かない。

（父上ッ！）

ルシファアは叫びたくなる衝動を抑え、その瞳をニーシュに向けた。

その顔を忘れぬために。

そして強くその心に刻み込んだ。

復讐を成し遂げる事を。

それを可能に出来るほど強くなることを。

睨み付けるようにニーシュを凝視するルシファアはある異変に気づく。

サタンの首を切り落としたニーシュがその場に倒れこんだ。

慌てて後方から、魔道士マフューが駆けてくる。

即座に回復魔法を詠唱を破棄し発動するが、ニーシュは動かない。

「ニーシュ！ニーシュ！！」

マフューの発動した回復魔法が効いていない様子であった。

「ルシファー様……参りましょう。これ以上は危険です。」

トウィーニーに諭され、名残を惜しみつつ後宮を後にした。

城を出た後、彼らは三日三晩、南方の アニユチララブマ山 を目指した。

その間の記憶をルシファーはあまり覚えていない。

気づいた頃には、 アニユチララブマ山 の麓の名前も無い町の近くの小屋にいた。

だがはつきりとしているのが、あの日父であり、魔族の王の中の王サタンが殺されたという事。

勇者ニーシュ、魔道士マフュー、戦士チエムを殺し復讐を成し遂げるという事。

そしてその事を アニユチララブマ山 の山中で固く誓ったという事。

彼はこの十年の間に強くなった。

それはかつての大魔王サタンにも匹敵するほどに。

だが彼の太いなる復讐の旅路はまだ始まったばかりであった。

002（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

↓指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「坊ちやま……お早うございます。もう、お目覚めでしょうか？」
扉一枚で隔てられた廊下からトウイーニーの声がする。

「ああ。もう起きてるよ。」

ルシファアはトウイーニーが起こしにくる半刻程前に目が覚めていた。

昔は部屋の中にまで押し入ってきて起こしにきていたトウイーニーも近頃は、部屋の前の扉越しに確認するだけになった。

惨劇が繰り広げられた夜から十年、決意を心に決めた夜から十年が過ぎ、ルシファアは十八歳の青年へと成長を遂げた。

背丈も百七十を裕に超え、幼かった声はますます低く、鋭くなった。

「朝食の準備が来ています。着替えがお済になりましたら、降りてきてくださいね。」

扉越しにトウイーニーはルシファアへ朝食を採ることを促す。

「ああ。すぐに行くよ。」

ルシファアがそう告げるとトウイーニーが階段を下っていく音がする。

寝巻きを脱ぎ捨てたルシファアはベッドの横に置かれた旅の支度を見下ろす。

（抜かりはないな。）

そう心の中で呟いて旅用の丈夫なパンツとシャツに袖を通す。

今日はルシファアと仲間達の旅立ちの日であった。

ルシファアにとっても、その友にとっても緊張の度合いに差こそあれど、あまり気分良い睡眠が送れたとは思えなかった。

それほどまでに彼らの旅の目的は困難を極め、そして何よりも壮大であった。

ルシファアは着替えを済ませ、部屋を出てリビングへと降りた。

「お早う。トウイーニー。」

「お早うございます。坊ちやま。」

いつもと変わらないトウイーニー手製の朝食が食卓に並んでいた。彼女が朝早くから焼き上げたパン、朝市に並んだ野菜のサラダ、新鮮なミルク。

最近でこそ旅に備え自炊を学び始めたルシファーであるが、朝は決まってトウイーニーの作る朝食を二人で食べる。

それがこの十年間変わらない二人のルールであった。

席に着いたルシファーにトウイーニーは温めたミルクを差し出す。

「ありがとうございます。」

「いえ。それではいただきますようか。」

トウイーニーも席に着きいつもと変わらない二人の朝食が始まる。違うのはそれも今日で最後であるという事であった。

「やっぱり、行かれてしまうのですね……。」

トウイーニーはミルクの入ったカップを置くと寂しそうな表情を浮かべた。

「ああ。元より決めた事。」

ルシファーが勇者への復讐を決めた夜からちょうど十年。

ルシファーは自らの心に固く誓った決意の道を逸れることなく歩んできた。

「そうですね……寂しくなりますね。」

左目に眼帯を付けた 妖精族 のメイドの美しさは十年の年月程度では変えられない。

大抵の男であれば、そんな彼女の願いを反故になどはしないだろう。

それでもルシファーの決意は固かった。

「済まないな……トウイーニー。必ず目的を果たして帰ってくる。」

ルシファーは本心から出た言葉を口にする。

しかしそれはあくまで本心であって、根拠の無い願望に過ぎなかった。

実際には帰ってこれる保障も可能性も無いに等しかった。

「勇者は強いです。今の坊ちやまでも……。」

トウイーニーが口を濁した言葉をルシファーは理解していた。

勝てないかもしれない……殺されるかもしれない……。

そういつた不安はこの十年の修行で得た力をもつてしても、拭い去れる類の物ではなかった。

「わかつているさ。……それでも俺は行かなくちゃならない。」

食事の席を重苦しい雰囲気が漂う。

「そう……ですね。トウイーニーめは坊ちやまにお仕えた時から、いずれ離れる事を……覚悟しておりました。ですが……いざそうなつてみるとこれ程悲しい事とは……思いもしまませんでしたよ。」

トウイーニーはやや言葉につまりながら話を続けた。

「それでも涙をしまい……見送るのが私の務めでもありませんようか。」

トウイーニーの頬を一筋の涙が零れ落ちる。

しかしその顔は美しき妖精族の乙女の満面の笑顔に満ちていた。

「今までありがとう……。その左目の傷に固く誓おう。必ずやこの家に舞い戻り、勝利の報告と魔族の再興を宣言すると。」

「……はい。坊ちやまも……ご立派になりましたね。」

ボソツと呟いたトウイーニーの声をルシファーはあえて無視した。
(結局最後まで『坊ちやま』か。)

この十年間変わらない二人の主人と執事、師匠と弟子という関係は今日で終わりを迎える。

今日をもってその関係は、旅立つ者と帰りを待つ者になる。

余韻を楽しむかのように二人は最後の朝食を楽しんだ。

「そうれはそうと……坊ちやま達はこれからどちらへ？まさかいきなり勇者を探すという訳でもありませんでしょう？」

ルシファーにはいくつか候補があったが、中でも一番危険の少ない選択肢を選んでいた。

「まずは ゴルジディアン森 の前線支援基地を攻めようと思う。そこから一番近い ゴルジディアン山脈 の地下城に赴き、ゴブリン王に会う。」

「なるほど……。してその後は？」

「順々に大陸を巡り 六王 に協力を要請したい。勇者が魔族の地を離れている以上、まずは極東の魔王城、ひいてはその先の メルボー大橋 を越えない事には話にならない。それには 六王 の力が必要になるだろう？」

サタンの死後、魔族は混乱した。

元々一枚岩でなかった魔族は魔王という象徴的な権威を置くことでお互いの利権争いに終止符を打った。

それは数千年もの間変わらない常であり、それが次代の魔王を指名せずに突如没するなど考えられないことであつた。

それが突如現れた勇者によつてサタンは討たれ、押し寄せた人間の軍勢によつて人間への防衛線であつた メルボー大橋 を越えられるという事態を起こした。

元来魔族達が度々繰り返された 聖戦 に勝利出来た理由がこのメルボー大橋 の存在であつた。

圧倒的能力差は勿論だが、メルボー大橋 を越える事は人間の領地との間にある 死の谷 を越える唯一の術であつた。

数に勝る人間がいくら大軍を率いて押し寄せようと、唯一つの橋を一度に渡れる人数は限られる。

魔族は橋を使つて大規模戦闘を避けてしまえば、あとは能力の勝る魔族が少しずつ人間を殲滅していけば良い話だつた。

それがどこからともなく魔王城に現れサタンを討ち、メルボー大橋を内から攻められるなどという事は誰も思いつかなかつた。

そこに人間の大量軍が押し寄せられてはいくら能力に勝る魔族もひとたまりもなく、メルボー大橋の陥落を許すことになった。

最大の防衛拠点の消失、指揮系統最高権力の喪失、情報の錯綜は大きな混乱を生み、結果 六王 はそれぞれの領地を自らの兵によ

つて自力で防衛せざるをえなかった。

なんとか大陸の極東部分を失う程度で人間の侵略を留める事に成功したが、その後の 六王 は互いに残された利権を争い対立しているというのが現状であった。

「おっしやる通りです。しかし……坊ちやまが急に赴いたところで六王 がすんなりと服従するとは思えません。」

確かにトウイーニーの言うとおりであった。

魔族に出回った情報によれば、魔王城の住人は衛兵のみならず使用人や牛馬まで皆殺しにされたとなっている。

当然ルシファーも死んだと考えられている。

そんな中、魔王子を名乗る青年が現れたところで 六王 がおいそれと従うはずがない

「そうならば力づくで従えるまで、と考えているが？」

「それではなんの意味もありませんよ。力で従えた者たちがいざという時裏切ったり、或いは意気消沈としたりする事はよくある事です。」

またしてもトウイーニーの言うとおりであった。

しかし今のルシファーには自らの正統性を主張する術がない。

「ではどうしろと？」

「私めはこの十年間、坊ちやまに隠れてあるお方を捜しておりまして。」

「あるお方？」

確かにトウイーニーは日々の合間を縫って家を空けることがあった。

「サンジェルマン公爵です。」

魔族の爵位で言えば 六王 は一番上の大公に位置する。

その一つ下に位置するのが公爵で、 六王 に次ぐ権力者である事を意味していた。

「聞かない名だ。」

ルシファーは十年もの間、身の安全を守るため身分を隠して生活

してきた。

さらに魔王城にいた時は若干八歳であり宮廷の爵位持ちの名前など知る由もなかった。

「サンジェルマン公爵はサタン様のご学友です。吸血鬼族の長にして嘗てはサタン様とも肩を並べた名手。必ずやルシファー様の力になってくれるはずです。」

吸血鬼族 は魔族でも魔人族に並ぶとも劣らない魔力の持ち主として名高い一族であった。

その一族の長たるものの協力をもつてすれば、六王にルシファーの正統性を示す事も不可能ではない。

「なるほど……それほどの者ならば。して……居場所は？」

「モンスローン山道 を ウインビーンの森 へ抜けます。森を北に三里ほど行ったところにひっそりと佇む屋敷があります。今はそこにいらつしやるという情報を入手しました。」

「今は……というと？」

「サンジャルマン公爵は非常に気まぐれというか……変わった方で、数年に一度お住まいを変えられるんです。それで居場所を掴むのに随分かかってしまいました。」

（それならば今もじつとしている保証はない……ということになるか。）

「ただ……その……。」

「なんだ？」

「とーっても、とーっても変わった方ですので……お気をつけてください。」

心なしかトウイーニーの顔色が青褪めているように見える。

「その……サンジェルマン公爵と……何かあったのか？」

「なんでもありません！」

あからさまにその間に何かがあった事を示す反応であったが、ルシファーは敢えて深く聞く事を遠慮した。

青褪めた表情を浮かべ、細い腕には鳥肌が立っている……これは

深く聞くべき話ではないと判断した。

「そうか……。兎も角 モンスローン山道 を抜けると言う事は、最初に向かうのは当初の予定通り ゴルジディアンの森 か。そうと決まれば、急いだほうがいいな。」

「そうですね。あの方がいつまでも留まってくださると思えませんし。」

トウイーニーもだんだんと落ち着きを取り戻し、普段の冷静な顔になってきた。

「さあ、坊ちやま！残りを食べてしましましょう。」

すっかり会話に夢中になり朝食に手をつける事を止めていた二人は、再び皿に手を伸ばすと最後の朝食を味わった。

その様子はまるで歳の離れた兄弟のようであり、仲の良い親子のようでもあった。

カーテンから朝陽が射し込む。

その光が照らすのがルシファアの明るい未来か、はたまた終焉への導きかは誰にも知りえない。

それでも彼はその命を賭して進むしかなかった。

それがこの十年間変わることのない、彼の決意の行く方向なのだから。

003（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

↓ 指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

朝食を済ませたルシファアは自室に戻り旅の支度を整えていた。重厚な全身鎧に身を包むという選択肢は一族の教えに背く、とトウイーニーから修行の間、再三に渡り注意された。

そうなると多少味方に負担を強いてでも出来る限り装備は軽いに越したことはない。

朝食前に既に着替えを済ませていたルシファアは、壁にかけてあったローブマントを身に纏うと、数日分の食料と地図、ローブなどを詰めたザックの紐を締めた。

そして愛用の大剣とザックを背負い旅の支度が終わる。窓からはまだ昇りきる前の朝陽が射し込む。

（いよいよ、この部屋とも暫しの別れか……。）

十年もの間住んできた部屋ともなると名残惜しいものがあつた。思い返すように部屋を眺めてみれば、そこかしこに懐かしき思い出の品が溢れていた。

（おっと……大事な物を忘れていた。）

木製のチェストの上に置かれた写真立てには、幼き日のルシファアと今は亡き大魔王サタンの写真が入っていた。

裏側の止め具を外し、取り出した写真をローブの内ポケットへとしまう。

今度こそ旅の支度を終えたルシファアは再び1階へと降りる。

「いよいよですね……坊ちやま。」

またトウイーニーが寂しそうな表情を浮かべる。

「そんな顔をするな。俺一人ならまだしもカンヘルもニャルもいる。」

この十年間でルシファアが得たものはなにも強さだけではなかった。

ルシファアには魔力や魔法では遥かに及ばないものの、それぞれ

に一族の特徴を活かした特技を持った優秀な友が彼の最大の味方であった。

「そうですね……カンヘルもニヤルも私めの立派な弟子です。きつと坊ちやまの力となりましょう。」

「ああ……そろそろ行くよ。村のはずれで待ち合わせている。」

約束の場所はこの アニユチラブマ山 の麓に位置する名も無い村のはずれ、かつての 聖樹 の切り株。

朝陽が昇りきる前には各人、準備を整えて集合すること誓いを立てていた。

「左様ですか……。私めが言う事はただ一つにございます。いつてらっしゃいませ。」

そう笑顔で云うトウイーニーの瞳は若干の潤みを見せていた。

「ああ！必ず帰ってくる……行ってまいる！」

ルシファアは勢いよく玄関扉を開けると外へと飛び出した。

開け放たれた扉はゆっくりと閉じる。

残されたトウイーニーは蹲り、誰にも見せた事のない大粒の涙を流し嗚咽を漏らした。

そして大声で祈った。

「願わくば！どうか坊ちやま……ルシファア様が無事でありますように！」

トウイーニーがルシファアを「坊ちやま」と呼ぶのには理由があった。

彼女にとってルシファアはあくまでお目付け役を預かった子供であり、それは今日まで彼女の不変の務めだった。

しかし今は違う。

魔族の教えに「汝十七にして大人に非ず、汝十八にして子に非ず。汝旅を為して大人たれ。」というものがある。

ここで云う旅とは一つ大きな事を成し遂げて初めて大人になる、という事であるが今のルシファアにとってまさにこの旅こそがそれである。

トウイーニーにとって、それに赴くルシファアはもはや子供ではなく、一人の立派な大人だということだ。

扉を出れば、そこはもう旅の始まり。

ルシファアは今まさに、一つ大きな事に挑もうとしていた。

それも彼以外誰も成し遂げられないであろう大きな事に。

そんな彼を送り出すトウイーニーは祈らずにいらなかったのだ。
った。

そしていよいよ彼の本当の戦いが始まる。

ルシファアは駆け足で村のはずれへと向かった。

「ルシファア様ー！遅いですにやー！」

村のはずれの 聖樹 の切り株前には既にカンヘルとニヤルの姿があつた。

ルシファアはやや歩を速め、二人の下へ駆け寄った。

「すまないな。どれくらい待たせた？」

「私はそれほどでも。ニヤルは私より半刻ほど早く来たそうです。朝方から思っていたよりもトウイーニーとの別れを惜しんで家を出るのが遅くなってしまった、と感じていたルシファアはそれほど待たせていない事が分かり安堵する。

「えっへん！ニヤルが一番なのになー！」

「遠足前の子供のようですね……目の下に隈が出来てますよ。」

「にやにやにやー！」

またいつものカンヘルとニヤルのやり取りが始まった。

と云つてもルシファアでさえ気づかなかつたほどのニヤルの目元の隈にカンヘルは気づいていたのだから、まさに喧嘩するほどな壇らである。

ルシファアは二人のやり取りを意に介さず話を切り出した。

「旅の前に一つ変更点がある。」

「と云いますと?」

「なんにや?」

「当初の計画通り、俺達は ゴルジディアンの森 の前線支援基地を攻める。これは前に話した通り実戦になれる目的もある。」

「その後は ゴルジディアン山脈 の地下城ですね?」

「いや、 ゴルジディアン山脈 の地下城には行かない。」

「では……どちらへ?」

「 ゴルジディアン の森 をそのまま北へ抜ける。」

「北と云いますと…… モンスローン山道 でしょうか?」

これはトウィーニーがルシファーに話した通りであった。

「しかし……あまりに危険過ぎないでしょうか?」

カンヘルの云う意味をルシファーは理解していた。

モンスローン山道 は嘗てより アーシラト高原 …… 即ち魔

王城へ至る山道として整備されてきた要所であった。

南を ゴルジディアン の森 、北を ウインビーンの森 に挟まれた狭い山道ではあるが、最も効率良く アーシラト高原 へ至る道として古くから多くの者が利用してきた。

そしてそれは人間にとっても同様のことが言えた。

魔王城を指令基地に据えた人間勢力は ゴルジディアン の森 を西に抜けた ゴルジディアン山脈 でゴブリン王の軍勢と、ウインビーンの森 を西に抜けた サマサンナ湖 でケンタウロス王の軍勢と相對していた。

その戦闘の最中において モンスローン山道 は最も安全、かつ効率よく物資や兵の運搬が可能な行路になる。

それは今なお多くの兵や運搬車が行き来しているという事だ。

「確かに危険は大きい。だが今回の目的地はその先の ウインビーンの森 にある。当初の予定通り ゴルジディアン山脈 へ向かい、そこから迂回していくとしても、 ゴルジディアン山脈 の前線を背後からぬける事と モンスローン山道 を抜ける事の危険度はそう変わらないだろう。」

詭弁であつた。

実際に激戦が繰り広げられている戦地の兵とそこに赴く兵とでは疲労や負傷といった戦闘を左右する要素にあまりに差がある。

気構えという不確定要素を考慮しても、その差は歴然である。

「結局、行くしかないってことにや？」

ニヤルは難しい話になると途端に口を出さなくなるが、こういつた不穏な空気には敏感だった。

この場合、それが前衛的な方向で働いてくれるのが救いであつたが。

「そうだ。それに モンスローン山道 で人間に遭遇するかどうかはまだ分からない。」

カンヘルは難しい表情をしていたが、一度だけ頷いた。

「それからあまり時間が無いんだ。目的の人物がそこにそう長く留まってくれているか分からない。」

「誰に会いに行くにや？」

「サンジェルマン公爵という者だ。」

「分からないにや。」

「聞いたことがあります。確か……相当な変人だとか……。」

カンヘルもサンジェルマン公爵という人物についてトウイーニと同じような評価をした。

ただし今回は風の噂程度の曖昧な認識であつたが。

「そうらしい。聞くところによると父上の学友だったらしく、六

王 に力を借りるの手助けをしてくれるかもしれない。」

「なるほど……。公爵程の身分、サタン様のご学友とあれば、それなりの影響力もありましょう。」

「ああ。そうと決まれば、早々に出発したいんだが？」

「準備万端にや！」

「首尾は整っています。」

三人の表情は一樣に明るかった。

これから降りかかる困難や立ちはだかる壁の存在など微塵も感じ

させないほどに。

「それじゃあ行くぞ。」

「にゃー!」

「御意!」

三人は歩を進める。

希望とは程遠い旅路を行くために。

まず目指すは ゴルジディアンの森、人間の前線支援基地である。

今日はサタンが勇者の前に屈してからちょうど十年。

あの日から始まった復讐の物語は、今ようやく開演を迎える。

村を出立してから一刻ほど経過した。

ゴルジディアンの森 を行くルシファーら三人は談笑をするほど余裕があった。

「そういえば、カンヘルとニヤルはトウイーニーに別れの挨拶はしたのか?」

カンヘルとニヤルもルシファーと共に魔法の教えをトウイーニーから受けた。

才にあふれた三人であつたが、それを一軍の将を務める事が出来る程の実力まで仕立て上げたのはトウイーニーによるものが大きい。

「ニヤルは昨日のうちに済ませてきたにや。」

確かにニヤルは前日にルシファーの小屋を訪れていた。

「私は、最後の修行のときに。」

カンヘルは三日前の修行の時が最後の挨拶だったらしい。

「せっかくなら会っていけばよかったものを。」

ルシファーだけでなく、カンヘルとニヤルもトウイーニーには親子同然に世話になっていた。

「いや……その……なあ、ニヤル?」

カンヘルが口を濁しニヤルへ振る。

「にゃ！？そそそ……そうにゃ！」

振られたニヤルは動揺している。

「なんだ？」

ルシファアはやや眼光を強め、回答を迫る。

「はあ……。こうなつては敵いませんな。」

どうやらルシファアだけが状況を理解しておらず、ニヤルとカンヘルはお互い通じていたようだ。

「ニヤル達も朝方、ルシファア様のうちにいったのにゃ。でも……その……あまりに仲よさそうで……。」

「躊躇してしましましてね。それで自宅に戻って時間を潰していたのですよ。」

ルシファアは普段の冷静さを失い赤面する。

だが同時に少し寂しさを覚える。

それはこれから旅をしていく中であつてはいけない躊躇であつた。遠慮や同情、迷いや躊躇は時として仲間の身を殺める。

これはトウイーニーが最後の修行で教えてくれた事であつた。

「少し止まれ。」

ルシファアの促しに先を行く二人が歩を止める。

「よく聞いて欲しい。俺たちはこれから朝起きてから、寝るときまでずっと一緒にいる仲間なんだ。だから遠慮なんかするな。当然俺もお前達を家族だと思つて接する。」

これはルシファアの本心でもあり、願望でもあつた。

唯一の家族を無くしたルシファアにとって、カンヘルやニヤルといった友やトウイーニーは、家族にも等しい存在であつた。

あつて欲しかった。

「ルシファア様……。」

ニヤルが似合わない哀しげな表情を浮かべる。

「我が主の気を損ねるとは……私もまだまだ未熟ですな。」
カンヘルも難しい表情を浮かべる。

「よし！二人とも武器を取れ！」

と云いルシファアが背に負った魔剣を掲げる。

ルシファアは敢えて明るい表情を浮かべていた。

それに釣られてカンヘルとニヤルの表情も明るくなる。

ニヤルは腰に携えた短刀を、カンヘルは自らの右腕をそれぞれ掲げる。

「俺はこの魔剣に！」

「ニヤルはこの刃に！」

「私は我が腕に！」

「今日、この日より我等は血縁にも等しき盟約を結ぶ！たとえ離れ離れになろうとも我等はこの盟約に従い、共に歩むことを誓う！我が名はルシファア！」

ルシファアは促すように二人に目を向けた。

カンヘルとニヤルはそれに頷き、応える。

「我が名はニヤル！」

「我が名はカンヘル！」

三人は一様に清々しい表情を浮かべる。

傍目に見ればなんでもなような誓いであるが、この儀式的な行為は三人に盟約という名の確かな繋がりを産んだ。

今までは友や仲間といった不明確であつた繋がりを明確に意識する事で、お互いの内にある躊躇や遠慮を無くす事がルシファアの狙いであつた。

ルシファアの思惑通り事は運んだ。

「よし！それじゃあ先を急ぐぞ！人間の基地は近い！」

一行は再び前へと歩を進めた。

一歩ずつ踏みしめるように歩む大地は固く、生い茂る緑は深い。

それでもその全てが彼らの行く道を遮る事は無い。

まるでそれが大地の、緑の選択であるかのように。

人間の前線支援基地はもう目と鼻の先まで迫り、彼らの初陣は幕を開けようとしていた。

彼らの旅はもう始まっているのだ。

004（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

↓指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「ルシファア様ー？ルシファア様ッ！」

ゴルジディアンゴの森の前線基地での初陣を勝利で飾ることに成功したルシファア達達は、旅の最初の晩をその前線基地で過ごしていた。

もつとも基地といつても簡素な小屋が幾つか並んでいる程度の補給基地ではあるが。

しかし彼らが一晚を過ごすには充分すぎる物資と食料が揃っており、彼らは旅の最中にも関わらずシチューを頬張っていた。

「……ん！？ああ、すまない。どうかしたか？」

ニヤルの呼びかけによりやく気づいたルシファアが応答する。

「一点を見つめたまま動かないからびっくりしましたよ。何か考え事ですか？」

カンヘルもニヤル同様に呼びかけていたらしい。

「いや……なんでもない。」

ルシファアは余計な心配はかけまいと、あの夜の事、サタンが勇者によつて葬られた夜の事を思い出していたと言わない。

ニヤルとカンヘルの二人はこの基地に来る前に固い契りを交わした仲ではあるが、専らこの旅の目的はルシファアの私情に寄るところが大きい。

勇者への復讐は完全にルシファアの個人的な目的であり、魔族の再興は二人にも関係のある事柄だが、根本的には魔王子であるルシファアの目的である。

だからなおの事、ルシファアは二人に余計な心配はかけたくなかったのである。

「水臭いにゃー！ルシファア様、隠し事はよくないにゃー！」

「そつですぞ。我らはもう家族なのですから。」

ところがニヤル達に云わせれば、それはルシファアの取り越し苦

労であつたようだ。

怒つたような顔を向けるニヤルと穏やかな笑顔を向けるカンヘル
(また……余計な事を考えてしまったな。)

ルシファアは苦笑いを浮かべながら二人の顔を見つめ直す。

「そうだな、すまない。……あの夜の事を思い出していた。」

あの夜の事はニヤルもカンヘルもルシファアとトウイーニーから
聞いていた。

それが二人がこの旅に同行を決意した一因でもある。

「そうですか……。」

特にルシファアと付き合ひの長いカンヘルは思うところがあつた。
それは天性の魔力と努力で掴み取つた魔法の才を持つ一見完璧な
ルシファアが、時折見せる危うさのようなものであつた。

時たまルシファアは、今のようにあの夜の事を思い出し思考を停
止する。

それはある種の強烈なフラッシュバックのようなものであるとカ
ンヘルは推測する。

「だが心配するな。それよりも明日の事を話しておこう。」

カンヘルの心配をよそにルシファアは話を明日以降の予定に変更
した。

当初の予定であれば、このまま森を西に抜け ゴルジディアン山
脈 を目指す事になっているが、ルシファアが村を出る前に話した
とおり森を北にを抜け モンスローン山道 を目指す事に変更さ
れている。

ただこれにはいくつかの弊害を伴う。

一つは森を西に抜ける場合、 ゴルジディアン山脈 の戦地を背
後から突くためこれ以上前線支援基地にぶつかる事は無かつた。

しかし北に抜けるとなると話は変わってくる。

「二人とも朝の時点では気付いてなかったかも知れないが、俺達は
ここより北の調査をしていない。つまりここ以外にも支援基地、或
いはもつと重要な基地、要塞すらあるかもしれない。」

もう一つは追っ手の存在である。

当初の予定通り前線支援基地で戦闘を行った後、ゴルジディア山脈の地下城へ到達するのに相對する敵は戦地の人間軍だけのはずであった。

「それから……北に進むとなると当初より多くの日程を要する上、基地の壊滅を知った人間軍から追っ手がかかる可能性がある。」

そうなると当初考えていたより旅は困難の度合いを増す。

特に追っ手がかかるとなれば、基地を壊滅させた魔族を討てる、或いは相応の実力を持った者と戦闘になるパターンがある。

さらにはより多くの兵員を動員され、包囲戦に持ち込まれればいくら実力のある三人とはいえ困窮せざるをえない。

「それは避けたい事態ですね……。」

カンヘルも旅の困難さが増した事に気付き、顔をゆがめる。

「うーん……ニアルは難しい事はよくわからないのにや。」

ニアルも言葉ではこう云っているが、直感的に余り事が上手いっていない事を察していた。

「兎に角、あまり悠長にしている時間は無いということだ。明日は陽が昇る前に立つ。」

「それが賢明でしょう。」

「わかったにやー。」

三人はそれぞれに明日への決意を固め、残ったシチューを急ぎ口へと運んだ。

「食べ終わったら就寝にしよう。明日は朝陽が昇る前にはここを出立したい。」

ルシファアの言葉の意は先ほど話したとおりであった。

「そうですね。月の位置からして……今からだと恐らく六刻ほど寝られるでしょうか？」

「いや、一人は周囲の警戒にあたった方がいい。二刻ごとに交代しよう。」

「じゃあ最初はニアルにや！」

猫耳族 は夜中でも良く利く感覚を持っている上、感覚器官や身体能力を向上する魔法を得意としていた。

夜中の警戒活動に最も適していることは云うまでも無い。

「それでは次は私が。」

対してカンヘルはニヤル程警戒活動に向いているとは云い難い。

大きな身体は月明かりがあれば簡単に視認されてしまう。

ニヤルほど優れた感覚があるわけでもなければ、それを強化する魔法はどちらかと云えば不得手としている。

しかしカンヘルの場合、急襲に会い寝起きで準備の整わない味方を守ることに秀でている。

「じゃあ最後は俺が。」

そうなるとルシファーはこと警戒活動には向かない。

優れた感覚器官や身体能力を有しているわけでもなく、見方を守る術に長けている訳でもない。

頼れる物は冷静な頭脳と圧倒的な魔法を操る術。

それほど得意とはしていなくとも感覚強化や身体能力の向上の魔法も習得している。

夜明けが近くなれば敵の視認性も向上する。

「それじゃあ最初はニヤル、次が私、最後は主で決まりですな。」

彼らが無気なく決めたように思える警戒の順番にはこうしたお互いの得手不得手を知っている上での判断があった。

それは二人が長い修行の中で学んだお互いに対する信頼に縁るところが大きい。

「そうと決まればカンヘルとルシファー様、後はニヤルに任せてもう寝るのじゃ！」

寢床の準備はカンヘルが既に整えている。

寢床といっても基地から拝借してきた数枚の毛布しか無いが、幸い季節は初夏であり、この程度の寢床でも充分に休息がとれる。

「それじゃあニヤル、後は任せたぞ。」

「はいにゃ。」

カンヘルとルシファーはそれぞれに毛布へと包まり床に就く。

ニアルはそれを確認すると、火を取り囲み寝ている二人を見下ろせる大木の枝に飛び乗った。

（ここにやら周囲も見渡せそうにや。）

ニアルは腰に携えた短刀に左手をかけると、周囲を見渡した。

辺りは木々が生い茂っているが、基地の建屋が並ぶこの辺りだけ開けていた。

ニアルはふと空を見上げる。

（今夜は月が綺麗にや。）

星が輝く夜空には月が一際強く輝いている。

それは旅が始まって初めて三人で過ごす最初の夜を祝福しているかのようなだった。

ニアルは視線を眼下で寝ている二人に向けると、二人を起こさないように詠唱を破棄した中級感覚強化魔法　メトトミューブ　を發動した。

メトトミューブ　は視覚と聴覚を強化する魔法で、元々感覚の優れたニアルが使用すれば、日中活動するのと変わらない視覚と広い範囲の音を聴くことが出来る聴覚を手に入れることが可能であった。

その索敵可能範囲は半径半里を超え、まさに簡易のレーダーのような存在であった。

（今の所、怪しい音も聞こえないにや。）

ニアルは安堵しつつ、一旦魔法を解除した。

彼女はルシファー程膨大な魔力を有してはいない。

いくら中級魔法とは云え、下で寝ている二人に気を使い詠唱を破棄して魔法を常時發動していたら魔力が持たなくなってしまう。

この場合、一定の間隔で魔法を發動し警戒に当たるのが最も正しい選択肢であった。

まだまだ夜は長い。

一度大軍に囲まれたり、奇襲を受ければ苦戦は必須である。

ならばそういった危機は未然に防ぐのが最良である。
ニヤルは決意を新たに、周囲の警戒を続けた。

「……ヘル……カンヘル、起きるにゃ！……おい、でくの坊！」

すっかり寝入っていたカンヘルの耳に耳障りな声が聴こえてきた。
「……誰がでくの坊だ！」

彼が村にいたところの一日は実に清しく、満ち足りていものであった。

朝は鳥のさえずりとカーテンから漏れる陽の光で目を覚まし、簡単な朝食を取り、修行に出かける。

昼は師匠であるトウイーニー手製の昼食で休息を取る。

夕方には厳しい修行を終え、またトウイーニーの豪勢な夕食が待っている。

しかし今は違う。

いつ何時襲いくるか分からない人間に備え、ゆつくりとした休息などとってられないのだ。

（しかし……しかしだ。こんなに邪な悪意に満ちた起こされ方では、とれる疲れもとれない。ここは一言ガツンと……。）

「シーっ！ルシファー様が寝てるんだから、もう少し静かにするにゃ！」

（それは……貴様が……。）

沸々と沸いてくる怒りを抑え、カンヘルはルシファーの方を見た。
幸いまだ目を覚ますには至ってはおらず、安堵した。

「もう交代の時間か。」

「そうにゃ。あとは頼んだのにゃ。ふあゝ。」

そう云ってニヤルはカンヘルの毛布を剥ぎ取った。

「なっ……お前の毛布ならそっちに用意してるだろ。」

カンヘルが指差した方には確かに一枚の毛布が用意してあった。

「ニヤルは寒がりなのによ。いいからさっさとあっち行くによ！」
キリツとした睨みを利かせるニヤルであるが、云ってる事は無茶苦茶である。

カンヘルが用意した毛布は焚き火でしっかりと温まっているはずである。

（それが分からないはずでもなかるうに。）

「うーん、あったかいによ。」

そうこう考えている内にニヤルはさっさと装備を脇に置いて毛布に包まってしまった。

（やれやれ、こいつの考えることはよくわからん。）

「おい。何か異常はなかったのか？」

「……もうお腹……いっぱいによ」

（なんて早さだー!!）

ニヤルは毛布に包まってものの数十秒で寝てしまった。

カンヘル達は今までの修行の中で何度か夜中訓練を行っていたが、ニヤルの寝入りがここまで早い事には気づいていなかった。

カンヘルはニヤルがそれほどの緊張と疲れの中で警戒に当たっていたと推測し、余計に緊張感が高まる。

彼の場合、全身鎧が常時装備である為、身に付けるのにそれなりに時間がかかってしまうのが難点であった。

この機を狙われた場合、困難は必須である。

それを避けるためにもニヤルには異常の有無を確認したいという意図があった。

（まあ特に異常は無かったという事だろう。）

カンヘルはそう判断して装備を身に付けた。

それから周囲を見渡して先ほどまでニヤルが登っていた大木の根元に腰掛けた。

カンヘルの場合、感覚強化の魔法は得意としていない。

身体能力向上の魔法は心得があるが、ここで用いることは得策とは云えない。

ここでの彼の役割は奇襲の際、寝ている二人が睡眠状態から戦闘状態へ移行するまでの間、二人を守りきる事にある。

であれば、ここは魔力を温存し、敵の奇襲に備えるというのが最善である。

カンヘルは自ずとそうした役割を理解し、そしてそれを実行していた。

（何分……二刻という時間は長いな……。）

カンヘルはそう心の中で呟いて、落ちていた小枝を焚き火の中へと投げ入れた。

彼の云う通り、夜はまだまだ長かった。

二十二刻辺りに床に着いた事を考えると、ちょうど日付が変わっている頃であった。

早朝四刻半には身支度を整え、此処を立つとしてもまだ半分も過ぎていない。

警戒を緩めるにはまだ至らなかった。

もし前線支援基地と他の基地や前線との間で夜間の定時連絡などがあるとすれば、敵が基地の異常を疑っても不思議ではない。

そうになると他の基地から様子見の偵察がいつ来てもおかしくない。そしてそれは時間が経てば経つほど襲来リスクが高まってくる。カンヘルはそれに加え一つの心配事があった。

（ルシファー様はまだあの時の事を思い出されているのか……。）

それは先程、ボーっと一点を見つめたまま動かなかったルシファ―の事であった。

カンヘルは長い付き合いの中で、ルシファーのこうした挙動を何度か見かけている。

まるで完全に停止してしまっただかのようにさえ思えるその挙動を見るたびに、カンヘルは云い様のない不安に襲われる。

もし戦闘中、或いは命の危機に瀕したときにその挙動が訪れてしまったら……いくらカンヘルとは云えど守りきれぬ自信はなかった。（しかし、今考えても仕方あるまいか。）

事は起きてからでは遅いとは云うが、この場合ルシファーが自らなんとかせねばならない事であった。

実際カンヘルがそれを伝えたところでどうにかなる程、浅い問題ではない。

今カンヘルに出来る事は、もしそうなった時にルシファーを守り抜く事にある。

そして今の彼の役割もそれと同じ事であった。

カンヘルは再び、決意を新たに警戒心を強めた。

彼らの最初の夜はまだまだ長かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5383y/>

魔王子復讐記

2011年11月28日09時50分発行